

近畿地区

「西の安田」はゴジラタイプ

文・谷上史朗

安田はゴジラ型スラッガー

関西圏の高校2年生野手で、真の長距離砲」と太鼓判を押せるのは、すでに甲子園デビュー済みの安田尚憲（履正社）と岡田悠希（龍谷大平交）だ。他にも神戸国際大付の4番で秋の近畿大会でも2発の猪田和希や安田の後ろを打つ履正社の4番・若林将平。今春日本一の智辯学園で4番、今秋は1番で打線を引っ張る福元悠真もミート力と長打力を備えている。

ただ、先方も長距離砲として生きていけるであろう筆頭はやはり安田と岡田。秋は岡田が技術面・メンタル面ともに乗り切れず、大きな課題を残した。対して安田は近畿大会制覇のチームの主軸として安定した活躍。今年は寺島成輝が引っ張った関西ドラフト戦線だが、来年の主役は俺だ、となるべ

く風格も身につけてきた。

近畿大会終了時点で通算43本塁打。今年になって35本塁打と一気に量産体制に入り、スカウトも「東の清宮、西の安田というレベルになってきた」と期待を込める。履正社の先輩にはT・岡田（オリックス）という左打ちの大型アーチストがいたが、イメージ的には岡田よりも松井秀喜（元巨人ほか）だ。つまり、センターから左中間方向への長打も得意とした岡田タイプではなく、安田の打球はほぼ引っ張り。本人はそのあたりを今後の課題にも挙げながら、自らの長所であることも自覚。

「引っ張った感じで左方向に飛ぶ打球が理想。それで長打を増やしていければ一番です」

大阪大会、準決勝の大阪桐蔭戦で放った舞洲ベースボールスタジアムのフェンス直撃弾を理想の1



着実に成長を続ける安田尚憲。引っ張った打球の破壊力は圧巻



センバツ出場の可能性が高い猪田和希。大舞台でどんな打撃が楽しみだ

本とも話していた。試行錯誤のテークバック

188センチ92キロ。左打席に立つだけで威圧感は十二分。スイングスピードも申し分なし。課題はタイミングの取り方だろう。

春の時点ではほぼテークバックを取らずに、グリップを置いたその場所からバットを出しにきている。スタンドから眺めていても「間」が感じられず、球をとらえにくい動きが忙しく見えた。それが夏、さらに秋の大阪大会あたりまでは捕手側に小さく、じわっとグリップを引き、ボールとの距離をうまく作り始めているように変化。ところが、秋が進む中で続けて観戦すると、試合ごとに微妙な違いが見え、日替わりと判明。

「いろいろ試しています。基本、動きが硬くて、硬いと突っ込みやすくなる。なんとか柔らかく、という気持ちはいつもあります」

各試合後、常に質問を受ける清宮のバッティングについては「柔らかさがあるのが印象的。今でそれだけホームランも打っていて率も残せるのは凄い。自分には柔らかさをタイミングの取り方にもつなげて見ているようでもあった。ただ、先々の世界では長距離としての資質はこちらが上という見方は十分成り立つ」

原稿を書いているのは神宮大会直前だが、初めて同じ舞台に並び立つ2人はどう見えるのか。並ぶからこそ、一気に安田尚憲の名が全国へ広まることも十分にあるはずだ。